

『**𤑔原**』
論

高
橋
正
和

第一章 『価値』

『価値』は「経済学」の書物であると云うのが定説である。例えば、今世紀最大の叢書とも云うべき「日本思想大系」所収の『三浦梅園』（岩波書店刊）の解説で、京都大学人文科学研究所の島田虔次教授は次の様に述べている。

河上肇が明治三十八年『国家学会雑誌』一九卷五号に「三浦梅園の価値及び本居宣長の玉くしげ別本に見られたる貨幣論」を書いて、梅園がグレシャム（一五七九死）の法則を発見していることを指摘した。以後、梅園は単にいわゆる学者、儒者としての外に、むしろ経済学史上の人物として論ぜられることとなる。（六三七頁）

同じく京都大学人文科学研究所の山田慶児教授は、叢書「日本の名著」『三浦梅園』（中央公論社刊）の内から、共著者の吉田忠東北大学教授の非常に優れた作品と評価すべき『贅語』の抄訳部分をカットして、新しく表紙と序文を付け替えただけで「新刊書」のポーズを採ると云う「詐欺的著作方法」で、昭和の最後の歳に、「第一五回・大仏次郎賞」を受賞した。

此の書物は文字通りの『黒い言葉の空間』であるが、次の様な『価値』に対する解説を試みている。

かれの現実への関心がなみなみでなかったことは、『玄語』が完成に近づいた時期に、それと平行して、経済学の論文『価値』（一七七三）を執筆しているところからも、うかがえる。一九〇五年、河上肇は『国家学会雑誌』に「三浦梅園の価値及び本居宣長の玉くしげ別本に見られる貨幣論」を発表し、『価値』にいう「悪幣盛ン二世ニ行ハルレバ、精金皆隠ル」が、いわゆるグレシャムの法則にほかならないのを指摘した。じつをいえば、河上のこ

の論文が近代における梅園研究の第一歩であった。

しかし、島田教授と山田教授は、どうやら『価原』はおろか河上肇の論文さえ読んでいない事実を、自ら丁寧に告白したにしか過ぎない。梅園は『玄語』の初期稿本の一冊である『垂綸子』の中で、既に、私がここで問題にしようとしている事を、梅園哲学上の非常に重要な哲学的問題としているからである。世上に流布している『梅園全集』所収の『垂綸子』には、編集者の手落ちで、『垂綸子』の「目次」が掲載されていない。しかし、『玄語』の第五稿本の梅園自筆稿本の表紙には、其の「目次」が次の様に大書されている。

一元氣	氣質
一二	直円
転持	明暗
寒暑	水火
機	
声主	感應
生化	命上編
同下編	後序
図説	
	十五編

全部で「十五編」から成る『垂綸子』の第十編の「声主」が島田教授と山田教授の解説を否定する根拠である。梅園は『垂綸子』の「声主」編の編頭で、「声主」と云う概念を次の様に定義している。

資料一

其ノ主ヲ知りテ其ノ声ニ惑ハザル、通ズルニ幾ヒカナ。主ナル者ハ実ナリ。声ナル者ハ名ナリ。名ナル者ハ実ノ声、実ナル者ハ声ノ主。名ヲ知レドモ主ヲ知ラザレバ、門ヨリ入レドモ盤桓シ、主ヲ知レドモ名ヲ知ラザレバ傍徨ス。……割注……良馬ヲ得テ「神竜」ト名ヅケシ者ノ有リ。「神竜」至ルト聞キテ、知ラザル者ハ驚キテ走りタリ。……

そもそも梅園哲学は「声主」の問題を疎外したところには成立しない。故に、梅園は僅か十五編の一編に「声主」の編を組込まざるを得なかったのである。安永四年に一応の完成を見た、いわゆる『安永本玄語』の時期に既に完成していた「例旨」の第八条にも、此の「声主」論は次の様に明示されている。故に、其の重要性は謂までも無い。

資料二

声ハ名ナリ。主ハ実ナリ。主ハ天ナリ。声ハ人ナリ。人ヲ以テ天ヲ呼ブ。或ハ相ヒ称ヒ、或ヒハ相ヒ乖ク。或ヒハ声ハ異ニシテ主ハ同ジク、或ヒハ声ハ同ニシテ主ハ異ナル。故ニ、「一一」ノ名モ「陰陽」ナリ。天地ノ性モ亦

タ「陰陽」ナリ。・・・割註・・・良馬ヲ得テ神竜ト名ヅクル者ノ有リ。神竜、至レリト聞キテ、識ラザル者ハ驚キテ走ル。死鼠ノ未ダ屠サザル者ヲ囑ニシテ、諸ヲ人ニ贈ル者ノ有リ。曰ク、「璞」ヲ贈ルト。其ノ人、以テ未ダ磨カザルノ玉ト爲シテ、以テ之ヲ憚ブ。之ヲ呼ブコト異ナレバ則チ其ノ主ノ同異ヲ察セズシテ、先ヅ之ヲ疑フ。之ヲ呼ブコト同ジケレバ則チ其ノ主ノ真仮ヲ弁ゼズシテ、先ヅ之ヲ憚ブ。

更に、『安永本玄語』の「小冊・人部」の「言動」の節に、一二の字句の修正は有るものの、ほぼ『垂綸子』の通りの説話が引用されているので、此の説話の重要性は梅園哲学に一貫している事実を知ることができる。

資料三

主ハ実ナリ。天成ナリ。人爲ヲ竣タズ。声ハ名ナリ。言有リテ而ル後ニ成ル。人ノ事ナリ。名ナル者ハ実ノ名ニシテ、実ナル者ハ声ノ主ナリ。名ヲ知レドモ而レドモ主ヲ知ラザレバ、門ニ入りテ盤桓ス。主ヲ知レドモ而レドモ名ヲ知ラザレバ、門ヲ出ズレドモ而レドモ傍徨ス。・・・割註・・・良馬ヲ得テ神竜ト名ヅクル者ノ有リ。神竜ノ至ルト聞キテ、而シテ、識ラザル者ハ驚走ス。死鼠ヲ囑ニシテ、諸ヲ人ニ贈ル者ノ有リ。曰ク「璞」ヲ贈ルト。其ノ人ハ、以テ、未ダ磨カザルノ玉ト爲ス。之ヲ呼ブコト異ナレバ、則チ其ノ同異ヲ察セズシテ之ヲ疑ヒ、之ヲ呼ブコト同ジケレバ、則チ其ノ主ノ真仮ヲ弁ゼズシテ先ズ之ヲ信ズ。

（『梅園全集』二〇四頁下）

私がここで、くどくどとした前置きをした上で語ろうとしている事は、結論から云えば、『価原』は決して、近代科学にいわゆる「経済学」の書物では無いと云う事実である。それは、支那学に云うところの「経世済民の学」に関する書物である。近代科学にいわゆる「政治学」と「経済学」と「社会学」と「倫理学」が総合的に対象となっている書物である。故に、島田教授と山田教授が陥ったところは、紛れも無く「声主」の混乱である。

『価値』は、岩波文庫の『三浦梅園集』で示しても僅かに四十頁から成る小品である。此の中から、私が特に注目したい話柄を以下に挙示し、其れに私なりの「新解釈」を施すことに依つて、『価値』が決して「経済学」のみの書物では無い事実、「政治学」と「社会学」と「倫理学」の範疇をもカバーしている事実を証明し、更に、『玄語』に凝集されている、いわゆる「条理学」の応用学でもある事実にまで及ぶことにする。

資料四

禹謨ニ、徳、惟、善政。政在養民。水火木金土穀、惟、修。正徳・利用・厚生、惟、和、トイヘリ。水火木金土穀、コレヲ六府ト云ヒ、正徳・利用・厚生、コレヲ三事ト云フ。後世ノ治、千術万法有リトイヘドモ、此六府・三事ニ出デズ。禹謨ニ、水火木金土穀トイヘルヲ、其後ハ穀ヲ土ニ合シテ、五行トモ五材トモイヘリ。天下ノ至宝トイフ者ハ、此六府ナリ。

此の一節は、『価値』の本文の書き出しである。支那古代の聖天子、堯・舜・禹の禹の記録が『禹謨』である。「徳モテ惟レ政ヲ善クス」とは、徳治主義の宣言である。「政ハ民ヲ養フニ在リ」とは、徳治主義に基づく善政の目的は、被治者である人民が平和な生活を営む様にすることである。人民とは、梅園の表現を借りれば、「士農工商」の事。『価値』に、「人ハ四民トテ、士農工商ニ過ギズ」と明言しているので慥しである。そこで問題になるのが徳治政治の具体的な方法である。『禹謨』では「正徳」「利用」と「厚生」。梅園も此れを継承する。次の様な一節は、『禹謨』の思想を継承し、更に梅園流の解釈を加えたものとして重要である。

資料五

然レバ、各其分ニ応ジ、残ヲフセギ賊ヲイマシムベキコトナリ。其事乃チ経済ナリ。廻チ利用・厚生・正徳ナリ。

(七六頁十一行)

「資料五」に依れば、「正徳」「利用」「厚生」は「経済」と云う概念と等置されている。つまり、ここにいわゆる「経済」は「エコノミックス」では無く、支那学にいわゆる「経世済民」であるのだ。「正徳」は「第三章」に於いて詳述する。

そこで、「利用」について、梅園の語るところに耳を傾ける事から始めよう。

資料六

『大学』ニ財ヲ生ズル大道ヲ、「生之者衆、食之者少、為之者疾、用之者序、則財恒足矣」トイヘリ。是レ則チ『禹謨』の利用の工夫ナリ。有國者、常ニ此語ヲ体認セバ、天下、將ニ指掌ニ在ラントス。

「工夫」と云う耳慣れない概念は、北宋や南宋に榮えたいわゆる「宋学」で瀕用されるもので、固く云えば「修業論」のこと、一般に「方法論」のことと理解すれば良い。故に、『禹謨』にいわゆる「利用」の方法論は、「四書」の内の『大学』にいわゆる「財ヲ生ズル大道」即ち「生活財」や「消費財」を生産する方法論であると梅園は解釈する。詳しくは、農業生産物に関しては、「之ヲ生ズル者ヲバ衆ク、之ヲ食フ者ヲバ少ナク」すれば良い。工業生産物に関しては、「之ヲ為クル者ヲバ疾ク、之ヲ用ヒル者ヲバ序ヤカ」にすれば良い。要するに、「一即一」「一即一」の関係にある「生産」と「消費」のバランスを保てと梅園は主張しているのである。

次に、「厚生」について、梅園の語るところに耳を傾けよう。

資料七

『論語』ニ、富之ト云フモノ、乃チ厚生（生を厚ふする）ナリ。

『大学』や『論語』の様な古典の文章で、新しい概念を解釈する方法は、支那や日本の解釈学の方法であり、思想発展の方法でもある。梅園は、「厚生」即ち「富」の理想的実態を、次の様にも説明してみせる。

資料八

市肆ノ日タニ栄へ、人ノ弥増ヲ蕃昌トハイヘドモ、郡県ノ人モ増シ、市肆ノ人モ増サバ、真ノ蕃昌ナルベキ……。

勿論、ここには、此のバランスを欠いだ現実社会の悲劇に対する具体的にして且つ詳細な検証が施されている。インフレに繼ぐインフレの中で倫理的にも社会的にも、勿論、経済的にも混乱の極に陥っている十八世紀末の現実の多面的な角度からの具体的な検証が施されている。

例えば、インフレに関して、梅園は次の様に述べている。

資料九

安永壬寅十月、追加シテ曰ク、予（梅園の自称）、コノ書（『価値』）ヲ著スル時、猶、銀一錢、錢六七十文ニ当ル。今ハ已ニ百ヲ過グ。而シテ、米価、京師・浪華、百錢ニ充ツト傳フ。春米、猶、価ヲ増スベシ。

河上肇以来、梅園の経済学説として虚名を走せている「グレシャムの法則」と等置された一節は、実は、此の「インフレ現象」と濃厚に関係しているのである。ところが、河上博士の此の学説は、次の様な断章取義的・非学問的方法に依つて導き出されている。

資料十

所謂グレシャムの法則は、当時に於ける他の学者と等しく、彼の既に認め居たりし所なり。曰く、「悪幣盛んに世

に行はるれば、精金皆隠る」と。言、簡にして尽せりと謂ふべし。

しかし、「悪幣盛んに世に行はるれば、精金皆隠る」と云う名句は、実は、次の様な「インフレ現象」を紹介した際の結論として導き出されたものである。しかも、それはグreshamのいわゆる「悪貨は善貨を駆逐する」と同一の現象を語りながらも、梅園は其れを「経済現象」として捕らえようとしたのではなく、「条理」的経済現象の一つとして問題にしているのである。「条理」については、後に節を改めて説明する。

資料十一

宋ノ頃、錢、ヒタスラニ増ス程ニ、後ハ小サク輕クナリテ、緤環錢トテ、縷ニ貫キ水ニ入ルレバ、縷ニ引カレテ沈ミヤラヌ程ニナリ、物ノ価シキリニ貴クナリテ、後ニハ一斗ノ米価、一万錢ニイタリシトカヤ。近年、錢ハ鉄トナリ、銀ハ鈔トナル程、物価、騰躍スル者、緤環錢ト同意ニテ、衡、傾キシ故ナルベシ。モシ其柄ヲ正サズシテ、其低昂ニ從ハントナラバ、金銀、瘡多クシテ、富家ハ則チ瘡金ヲ積ミ、貧家ハ則チ瘡債ヲ重ネン。「悪幣、盛ンニ世ニ行ハルレバ、精金、皆、隠ル。」

『禹謨』にいわゆる「利用」と「厚生」に対する梅園の解釈の要点は以上の様なものである。では、最初に保留した「正徳」に関して梅園はどの様な解釈を下しているのだろうか。『仙原』の最終段階に至って梅園は、「利用」「厚生」の二事と絡ませながら次の様な注目すべき見解を展開している。

資料十二

『漢書』ニ、「背本而趨末、食者甚衆、是、天下之大殘也。淫侈之俗、日々に長、是、天下之大賊也。」トアリ。…然レバ、各、其分ニ応ジ、残ヲフセギ賊ヲイマシムベキコトナリ。其事、乃チ「經濟」ナリ。廻チ「利用」「厚生」

「正徳」ナリ。サレバ「利用」「厚生」ニ何程ヨキ道ヲ得テモ、己レ「徳ヲ正」サザレバ、令スル所、好ム所ニ反スレバ、民、従ハザル習ニテ、礼讓廉恥ノ風オコラズ。イカナル良図善謀アリテモ、コレヲ起スニ従ヒテ、下吏・諸有司、金設ケ（金儲け）ノ趣向トナリ、コレヲ餌トシテ、悪徒、財ヲツリ、人ヲ虐タゲ、今マデアラヌ害ナド引出シ、功ナラザルノミカ、世ノ笑トハナリ侍ル。此故、「三事」、「利用」ヲ初トシ、「厚生」ヲ本トシ、「正徳」ヲ主トス。「徳、正シキ」時ハ、人、感化ス。

「利用」に依つて、農業生産物と工業生産物に豊かな余剰生産物が蓄積され、「厚生」に依つて、人民の生活が豊かにはなる。しかし、「正徳」に欠落があれば、支配者の命令は被支配者の情的欲望に真つ向から逆らうので、従わないのが通例である。茲に必要となるのが、「礼讓の心」と「廉恥の心」である。「正徳」とは此のふたつの心を産み出す倫理的基盤である。

例えば、初期資本主義の弊害として、極端な「拝金主義」の風潮が発生したのであるが、此れについて、梅園は次の様に述べている。

資料十三

金銀ニダニ富メル人ハ、無芸無能ニテモ、無礼不徳ニテモ、上下ニ渴仰セラルレバ、興シ難キハ廉恥ノ風ナリ。

資料十四

貴キモ賤シキモ、衣服飲食、居処交際、唯日々ニ華靡ニ走り、有司モ奉録ノ外、賄ヲ恃ミテ事ヲ弁ズル故、田地ノ租税モ重カラザルコト能ハズ。臣僚ノ奉粟モ、減ゼザルコトヲ得ズ。

金持ちは、金持ちなるが故に、唯それだけで、「無能・無芸」であらうと、礼儀知らずの非人格者でも、上から下ま

での全ての人々に尊敬される。貴族も賤民も皆んな皆んなファッションやグルメやリビングや社交に華靡を尽くし、公務員は給料外の賄賂の多寡に依つてのみ公務の処理をする。此の社会現象は二百年後の昭和末・平成初の其れと全く同じではないか。

第二章 『価値』と「条理」

『価値』が、河上肇以来、今日の内田義彦教授や山田慶児教授に至る定説の様な近代的意味での「経済学」の書物では無く、むしろ、「政治学」と「経済学」と「社会学」と「倫理学」が総合的に描出された、支那学にいわゆる「経世済民の学」であつた事實は、すでに前節に述べたところで明らかとなつた事であろう。

しかし、三浦梅園にとっては、実は、其の様な学問の総合性それ自体も、唯だ其れだけでは無意味なものでしか無かつた。いわゆる「事実求是」の「視座」から展望した場合に、「人体解剖学」の時代的粹を極めていた『解体新書』に對してさえ、一方では、

資料一

之ヲ讀ミテ、而ル後ニ、正ニ西人ノ人身ニ於ケル、嘗テ若干ノ星霜ヲ積ミ、若干ノ人ノ精神・智力ヲ重ネ、・・・
親試スル所有リテ、而ル後ニ其ノ圖書ハ始メテ成ル。一朝一夕、艸々ニ其ノ業ヲ卒ハル者ニ非ザルヲ識ル。

と、其の「近代科学」的な成果を高く評価しながら、同時に、

資料二

然レドモ、「条理」ニ由リテ之ヲ「剖析」スル者ノ無ケレバ、則チ、未ダ襟懷ニ憤々タルヲ免レズ。（『梅園全集』・

四四四頁下)

とて、『解体新書』の解剖学的方法が、梅園哲学にいわゆる「条理」に依って「一即一」的に「剖析」分解する方法を採用していない事実に対して、本質的な不満を述べている。

しかし、此の『解体新書』批判の「視座」は、当然、「経世済民の書」としての『価原』にも適応されていないければ、梅園学の立場は自己矛盾することになる。そこで、以下に、此の「視座」から、『価原』に対して、最も新しい私の新見解を読者の前に提供することしよう。

資料三

悪幣、盛ンニ世ニ行ハルレバ、精金、皆、隠ル。

小さくは「藩」、大きくは「日本國」に流通している全貨幣を「一」とすれば、「悪幣」と「精金」が「一」である。つまり、「一即一」的であると云うのである。

資料四

利ヲ見テ趨リ、害ヲ見テ避クルハ、天下ノ通態ナリ。

「利」と「害」が「一」で、「通態」を「一」とすれば、「趨態」と「僻態」が「一」ある。つまり、「一即一」的であると云うのである。

資料五

郡県ノ籍、年ヲ逐ヒテ減ジ、市肆ノ人、日ニ随ッテ増ス所ナリ。

「藩」や「日本國」の総人口を「一」とすれば、「郡県ノ籍」即ち「田舎」の人口と「市肆ノ人」即ち「都市」の人

口が「一一」である。

資料六

（貨幣經濟が発達した為に）稻、登ル時ハ、麦、民間ニ尽キ、麦、熟スル時ハ、粟、民間ニ竭ク。民、イカデカ荒歳ヲ凌グコトヲ得ン。誠ニ「一得一失ノ理」ニテ、昔、金銀、少カリシ世ハ、諸貨ノ通利、アシカリシカバ、コレヲ運ビ尽サズシテ、凶・饑・諸災ノ備モ有リキ。

此の「資料」にいわゆる「一得一失ノ理」と云う表現は、ストレートに「一一」の「条理」を述べたものである。此の場合は、農村に於ける「生産総量」が「一」で、「備蓄量」と「流失量」が「一一」である。

資料七

今ハ昇平ノ世ニシテ、纔ニ朝勤・属役ノミナレドモ、其臣僚ノ扶持ニダニ乏シ。万一、辺陲ノ警モアラバ、何ヲ以テ祖宗ノ意ニ答ヘ、国家百年ノ恩ニ報ゼン。遠キ慮ナケレバ、必ズ近キ憂アリ。有國者ノ急務、何レカ是ヨリ先ナラン。四民ハ之ヲ有國者ニ仰グ。有國者ハ是ヲ有天下ノ人ニ仰グ。

「有天下ノ人」とは「徳川將軍」のこと、「有國者」とは諸藩の「藩主」のこと。此の一節は「国防論」である。梅園は新井白石の『蝦夷誌』を読み、後日、第二回長崎旅行記とも云うべき『帰山録』に、ハンペンゴロ事件の翻訳者の一人でもあった吉雄耕牛からの情報を次の様に記録している。

資料八

吉雄、話の序に曰、我、竊に国家の為に東北を患ふ。西域の人の、人の國を奪ふや、多く干戈を動かさず。我國・東北は蝦夷の地也。蝦夷の北辺、已に西洋に得らる。若、蚕食して蝦夷を有せば、我國、常に北顧の患あらん。

〔梅園全集〕・一〇六四頁）

「資料八」は、一見したところ、「経世済民」の範疇から遠い様に見える。「昇平ノ世」即ち、二百年後の今日の日本と、「天下太平の夢」をむさぼり、「拜金主義」と「賄賂政治」にうつつを抜かしている点で、完全に同時現象を示している。梅園の時代にも、「国防論」は、さぞかし笑いのとされたことであろう。しかし、深く考えてみれば、亡國の民には、もはや「経世済民」の術を語る必要は無いのだ。

では、「条理」との係わりはどうであろう。『玄語』の「小冊・人部」に、次の様な一節がある。

資料九

有力、不能自衣食、恃奉於民。

無力、不能自守禦、依保於君。

君民、通工（仕事）、相共、奉保、以、迭執其役焉。故、君故、民、職奉其君、君、職保其民、・・・故、天人者「以反合一」。

（『三浦梅園資料集』・下巻・八三頁）

「訓読」 「有力」ハ自カラ衣食スルコト能ハズシテ、「奉」ヲ「民」ニ恃ミ、「無力」ハ自カラ守禦スルコト能ハズシテ、「保」ヲ「君」ニ依ル。「君民」ハ工（仕事）ヲ通ジテ、相ヒ共ニ「奉保」シ、以テ、迭ヒニ其ノ役ヲ執レリ。故ニ、「民」ハ其ノ「君」ヲ「奉」ズルヲ職トシ、「君」ハ其ノ「民」ヲ「保」スルヲ職トス。・・・故ニ天人ナル者ハ反ヲ以テ一ニ合ス。

（高橋詠）：「有力」即ち天子や殿様や武士は、自分自身の手で衣類や食料の様な消費財を生産し交易することができないので、「農工商」の三業に携わっている人民の奉公に期待している。逆に、「無力」即ち農民と

工業労働者と商人は、自分達の力で外敵から身を守ることができないので、天子や殿様や武士の保護に依存している。（以上の様な「一一」関係に依って）「君」と「民」は、それぞれの「天」的とも云うべき天賦の任務を媒介にして、互いに奉公したり保護したりし合う。此の様な関係と方法で、互いに自己の役割を執行する。故に、人民はそれぞれの職業としての農業と工業と商業に依って自分達が戴く「君」に奉仕し、「君」は其の「職務」に依って領内の人民を保護する。・・・故に、「天」的な職業や任務と「人」的な其の実践は、「条理」に従って「反」すればこそ「合一」する。即ち一種の調和世界がそこに現出する。

「資料九」に於ける「有力」は「君」、「無力」は「民」のこと。より正確には「士農工商」の内の「士」までと「農工商」のこと。故に、「一藩」「一國」の全構成員を「一」とすれば、其れは二大別して「有力」と「無力」即ち「君」と「民」の「一一」に分割剖析することができる。此の様な認識の仕方が「条理」に叶ったものであると梅園は考えたのだ。「反ヲ以テ一ニ合ス」とは「反観合一」の別表現である。

資料十

郡県ノ人ハ年々ニ減リ、都会ノ人ハ年々ニ増ス由ナリ。

小さくは、「有國者」即「藩主」の支配する「藩」の人口を全体の「一」とすれば、「郡県ノ人」と「都会ノ人」は「一一」である。大きくは、「天下人」即ち「國主」の支配する「日本國」をモデルとすれば良い。

資料十一

英断ノ君ニアラザレバ、其臣ヲ任ズルコトアタハズ。豪毅ノ臣ニアラザレバ、其業ヲナス事能ハズ。・・・唯、上

ニモ目前ニテ、人ニヨキ人ト謂ハレンコトヲハカル人ハ、非常ノ功ヲバ立テ得ヌ者ナリ。非常ノ功ヲ立ツル者ハ、非常ノ才ヲ抱ク。非常ノ才ヲ知ル人ハ、非常ノ君ナリ。君、（非常ノ）才ヲ用フル日、誉ル者半、謗ル者半、利モ又半、不利モ亦半ナリ。苟モ、識、明ニ、断（判断）、果ナルニ非ザレバ、事ヲ擾リ、人ヲ損フニ過ギズ。

「英断ノ君」と「豪毅ノ臣」が「一一」、「誉ル者半」と「謗ル者半」が「一一」、「利モ又半」と「不利モ亦半」が「一一」である。特に、「君・臣」が「一一」である証拠は『玄語』にもある。例えば、次の様な五節が其れである。

資料十二

臣、以奉君。其奉者、外有以保、内有以護。持之守之。於是、其君者、外有藩屏之保、内有傳保之護。（七六頁上）

「訓読」 臣ハ以テ君ヲ奉ズ。其ノ奉ズル者ハ、外ニ以テ保スル有リ。内ニ以テ護スル有リ。之ヲ持シ、之ヲ守

ル。是ニ於ヒテ、其ノ君ナル者ハ、外ニ藩屏ノ保ノ有リ。内ニ傳保ノ護ノ有リ。（『三浦梅園資料集』・二四

三頁）

「拙訳」 臣下は君主を奉戴するものである。其の奉戴者は外部に対しては「保護」と云う「一一」的行為の内の

「保」と云う行為をとり、内部に対しては「護」と云う行為をとり、其れに依つて君主を保持し、守護する。此の様に於いて、君主たる者には、外的には「藩屏」に相当する諸候の「保」と云う行為があり、内的には「傳保」と云う「守り役」・「側役」の「護」と云う行為が有る。

資料十三

君、以安民為職、臣、以奉君為義（義とは君たるものの「職」）（『三浦梅園資料集』・九六頁）（『梅園全集』・二二七頁上）

「訓読」 君ハ民ヲ安ズルヲ以テ職ト為シ、臣ハ君ヲ奉ズルヲ以テ職ト為ス。

「拙訳」 君主は人民を安寧にすることを以って其の職業と為し、臣下は君主を奉戴することを以って其の職業と為す。

資料十四

民、職奉其君、君職保其民。（『三浦梅園資料集』・八三頁）（『梅園全集』・二二〇頁上）

「訓読」 民ハ其ノ君ヲ奉ズルヲ職トナシ、君ハ其ノ民ヲ保ズルヲ職トナス。

「拙訳」 人民は其の君主を奉戴することを職業となし、君主は其の人民を保護することを職業となす。

資料十五

夫、人、類有男女、等有尊卑、・・・以人合者、君臣也、夫婦也。（『三浦梅園資料集』・六二頁）（二二〇頁上）

「訓読」 夫レ、人ハ類ニ「男女」ノ有リ。等ニ「尊卑」ノ有リ。・・・人ヲ以テ合スル者ハ「君臣」ナリ、「夫婦」ナリ。

「拙訳」 そもそも人間には、「男女」と云う「二」的種類が有り、「尊卑」と云う「二」的等級がある。・・・「天人論」にいわゆる「人」的「境域」で「合一」する者は「君臣」関係であり「夫婦」関係である。

資料十六

一年、年登レバ天下ニ穀満ツ。一年、年儉ナレバ、郡県穀尽ク。

「拙訳」 或る歳、実りの年となれば、天下に穀物が満ち溢れる。或る歳、不作の年となれば、郡県から穀物が尽き果てる。

此の一節では、「年登」と「年儉」が「一一」である。「年登」とは豊年のこと、「年儉」とは凶年のことである。

資料十七

故ニ、年、登ルヲ見レバ、遠客ノ帰舟ニ逢フガ如ク、余業ヲ捨テテ本業ニ帰ラントスル程ニ、庸作スル者、希ニシテ、余業ヲ務ムル者、怠ル。ココニ於テ、諸価、皆、騰貴ス。然フシテ、一年、穀、熟セザレバ、雨後、潦水（溜り水）、忽チ涸ルルガ如ク、又、本業ヲステテ余業ニハシル。・・・是レ郡県ニ凶饑ノ備ナク、一度ハ本業ニツキ、一度ハ本業ヲ離ルレバナリ。

「拙訳」 故に、実りの年をまのあたりにすると、あたかも遠國の旅人が故郷に帰る船に出逢ったかの様に、「余業」即ちアルバイトを放棄して「本業」に帰ろうとするので、庸作者の数が稀薄になって、「余業」に勤務する人が怠情になる。其の結果、諸物価はことごとく騰貴してしまう。そして、穀物の実らない年ともなると、あたかも雨後の溜り水がたちまちにして涸れるかのように、ふたたびまた、「本業」を放棄して「余業」に走る。・・・此の様な職業動態の現象が発生する理由は、「郡県」に凶作・飢饉に対する備蓄が無く、「一即一一」的現象として、「一一」的に、一度は「本業」に就職し、一度は「本業」から離職するからである。

此の一節では、「年、登ルヲ見レバ」と「穀、熟セザレバ」及び「余業ヲ捨テテ本業ニ帰ラントスル」と「本業ヲ捨テテ余業ニ走ル」及び「一度ハ本業ニツキ」と「一度ハ本業ヲ離ル」がそれぞれ「一一」である。

資料十八

今ノ貧民、一年ハ本業ニ走り、一年ハ余業ニ赴ク。

此の一節でも、「本業」と「余業」が「一一」で、「一度ハ本業ニツキ」と「一度ハ本業ヲ離ル」が「一一」である。「資料十八」は「資料十七」と同一行動に対する別表現である。

資料十九

西洋ノ医治、内ヲ略シテ外ニ詳ナリ。大ニ漢人、藩圉ノ外ニ出ヅ。漢人ノ治ハ、ムカシノ人、五運・六氣・五臓・六腑ナド云フコトヲ云ヒ始メシヨリ、終ニコレニ誤ラレテ、実測ニ暇アラズ。西人ハ、意ヲ実測ニ用ユ。故ニ人ノ臓腑・筋骨ノ如キモ、数（しばしば）、剝シテ、真ニ試ム。故ニ最モ精詳ヲ尽ス。蓋シ、天地ニ条理アリ、未ダ条理ヲ得ザレバ、実測アリトイヘドモ、是ヲ彷彿ニ得テ、猶ホ、真ニ遠シ。故ニ造化ヲ説クニ至リテハ、漢ニ「木火土金水」ト云ヒ、梵ニ「地水火風」ト云ヒ、西洋ニ「水火山氣」ト云フ。共ニ伯仲ノ説ナリ。

「拙訳」 西洋の治療医学は内科が手薄で外科が詳細である。非常に支那医学の枠を超出している。支那の治療医学にあつては、古代人は「五運」とか「六氣」とか「五臓」とか「六腑」などの学説を主張し始めて以来、とうとう、此れ等の学説に誤導されて、「実測」即ち実験医学に向かう時間のいとまが無かつた。西洋人は精神を「実測」に注いだ。故に、人間の臓腑や筋骨の様な部分に付いても、しばしば人体解剖をして実際に実験している。故に、最も精細詳密の度を尽くしている。しかし、良く良く考えてみるに、「天地」即ち大自然界には「条理」が存在するので、未だ「条理」に叶っていない限り、「実測」の側面が十分だとしても、ぼんやりとしていて、矢張り「真実」から遠いものである。故に、「造化」即ち万物万象生成変化のクラクリを解説する段に至つては、支那では「木火山金水」と云い、印度では「地水火風」と云い、西洋では「水火山氣」と云うが、三者共に、其の「非条理性」の程度に於いては似たり寄つたりの学説である。

「西洋医学」と「東洋医学」が「一一」である。「実測性」と「非実測性」も「一一」である。西洋医学に付いてのみ云えば、「略内」即ち「内科」が粗略であるのに対して、「外科」が詳細であると云う特徴も「一一」である。しかし、西洋医学それ自体は「非条理的」とであると主張する。梅園は『贅語』に於いても同様の主張を次のように展開している事實は、此の際、重要である。

資料二十

西人之学、務驗諸実。加以機巧、絲分縷析。殊于漢人之冥搜也。雖然、天地之間、一半露則一半沒矣。粲粲開之、則、混混含之矣。未得之於条理、不足以慰我心。（『梅園全集』・三九四頁上）

「訓読」 西人ノ学ハ、務メテ諸（これ）ヲ実ニ驗ミス。加フルニ、機巧ヲ以テ絲分縷析スルハ、漢人ノ冥搜ニ殊ナル。然リト雖モ、天地ノ間、一半ノ露スレバ、則チ、一半ハ沒セリ。粲粲ガ之ヲ開ケバ、混混ガ之ヲ含メリ。未ダ之ヲ条理ニ得ザレバ、以テ我が心ヲ慰ムルニ足ラズ。

「拙訳」 西洋人の学問は、努めて事實について実験する。其の上に、巧みなカラクリを操って、細々と分析する方法は、支那人の暗中摸索な方法とは相違している。しかしながら、「天地ノ間」即ち存在世界においては、「一」の全体の中での「一一」的（「偏半」が「没露」的条理構造の中で）露呈すれば、他の「偏半」が（「没露」的条理構造の中で）没却しているものである。

資料二一

有翻西洋驗屍書、上木者。讀之而後、正識西人之於人身、嘗積若干人之星霜、重若干之精神智力、驗若干男女老幼之屍、……然、無由条理、剖析之者、則、未免於襟懷、憤々。（『梅園全集』・四四四頁）

「訓読」 西洋ノ驗屍ノ書ヲ翻シテ本ニ上スル者ノ有リ。之ヲ讀ミテ而ル後ニ、正ニ西人ノ人身ニ於ケル、嘗テ若干ノ星霜ヲ積ミ、若干ノ精神・智力ヲ重ネ、若干ノ男女老幼ノ屍ヲ驗ミスルヲ識ル。……然レドモ、条理ニ由リテ之ヲ剖析スル者ノ無ケレバ、則チ、未ダ襟懷ニ憤々（かいかい）タルヲ免レズ。

「拙訳」 西洋の死体解剖に関する書物を翻訳して、日本で出版した人がいる。此の翻訳書を読破した結果、西洋人の人間の肉体に関する研究には、過去に若干の年月の蓄積があり、若干の精神と智力を傾注し、若干の老若男女の屍体に対して実験していた事実を認識した。……しかしながら、梅園哲学にいわゆる「条理」に依つて「剖析」即ち「一即一」的に解剖分析した人は存在しないので、私としては、未だに不満のわだかまりから免がれ得ないでいるのである。

第三章 「正徳」について

「正徳」に関する梅園の見解は、其れ自体が条理的である。つまり、支配者側としての「君」の側での「正徳」と、被支配者側としての「民」の側での「正徳」である。「君」の側での「正徳」について、梅園は次の様に主張する。

資料一

「利用」「厚生」ニ何程ヨキ道ヲ得テモ、己レ徳ヲ正サザレバ、令スル所、好ム所ニ反スレバ、民、従ハザル習ニテ、禮讓廉恥ノ風オコラズ。イカナル良図善謀アリテモ、コレヲ起スニ從ヒテ、下吏・諸有司、金設（儲）ケノ趣向トナリ、コレヲ餌トシテ、悪徒、財ヲツクリ、人ヲ虐タゲ、今マデアラヌ害ナド引出ダシ、功ナラザルノミカ、世ノ笑トハナリ侍ル。此故、三事、「利用」ヲ初トシ、「厚生」ヲ本トシ、「正徳」ヲ主トス。徳、正シキ時

ハ、人、感化ス。其指揮、水ノ壑ニオモムクガ如シ。(七七頁)

「拙訳」 「利用」と「厚生」の局面でどれほど立派な「道」を獲得しても、自己の「徳」を正しくしなければ、君主が命令する内容は人民の好みに反するので、人民は服従しないものであり、「礼讓廉恥」の風潮も興起しない。どの様に良い意図や善い企画が有っても、此れを具現化するに際して、下級役人やあらゆる官吏は金儲けの仕組みに組み込み、此れを餌にして、悪人は財産を形成し、人民を虐待し、それまでには存在しなかった新しい害毒を引き出す始末で、成功しないのみか、むしろ世間の笑いの対象となってしまう。此の故に、「三事」と云うものは、「利用」を手掛かりとし、「厚生」を本質とし、「正徳」を主体とする。君主の「徳」が正しい時には、人民は其れに感化される。君主の指揮の結果は、あたかも水が谷川を流れる様に自然化する。

「己レ徳ヲ正サザレバ」に於ける「己」とは「君」のことである。故に、上、支配者としての「君」自身の徳が修まらなければ、下、被支配者としての「民」の中には、決して「禮讓廉恥」の風潮が興起されない。「禮讓廉恥」の風潮が興起されないと、「君」の側が幾ら「良図善謀」即ち優れた政策を掲げても、「君」と「民」の中間に介在する下級公務員や種々の高級公務員が、自分達の金儲けの手段に転化し、政策をネタに、悪徳公務員達が私財の蓄積に専念し、逆に、下、人民を虐待し、過去に見たこともない新種の害毒が発生する、と云うのである。

資料二

罪ハ人々、己ガ造ル様ナレドモ、「民」ニ上タル人ノ徳ヨリ起ルコトナリ。

下、人民の侵す犯罪は、一見、下、人民自身が造ったものの様にみえるけれども、実際には、「民」の上に立つ「君」

の不徳から生じたものである。蓋し、二十世紀末の現代にも、見事に通用する達見ではないか。

次に、下、被支配者としての「民」の側の「正徳」について、梅園は次の様に主張する。

資料三

人、本業ニカヘルコトヲ得バ、民力、専ラ農桑ニ帰シ、地力、尽スコトヲ得テ、地ノ物ヲ生ズルコト、マスマス多クシテ、男女・余布・余粟、有リ。金銀、偏重ノ勢ナク、各、其力ヲ以テ金銀ヲ蓄ヘ、然シテ、暇日、孝悌忠信ノ教ヲ施サバ、人、「米粟」・「布帛」ノ貴キヲ知り、金銀、通利ノ物タルヲ知り、「廉恥禮讓」ノ風、興スベシ。（都会に出稼ぎに出ている）農民が「本業」としての農業に立ち帰ると、農民の労働力は、専業農家として、農業生産に帰一し、為に、農地の生産力が開發され尽くされ、生産性が高まり、「男女」即ち農村人口が増し、衣類や食料に余裕が生まれてくる。此の様な状況が整った上で、今日の社会を支配している「拝金主義」の風潮を押さえ、分相応の貯蓄を達成させた上で、余暇を見付けて、「孝悌忠信」の道德教育を施せば、士農工商の四民は、食料や衣類の貴重さを認識し、「金銀」即ち貨幣と云うものは、単に物資運搬の為の手段である事実を認識すれば、「廉恥禮讓」の美風が確實に興起されうる。

梅園は、「民」の「正徳」を支える根底に「厚生」を据え、支那の古典である『孟子』の言葉を引用して、次の様にも証明する。

資料四

孟子ニモ、「有恒産者、必有恒心。無恒産者、必無恒心」（恒産ノ有ル者ハ、必ズ恒心ノ有リ。恒産ノ無キ者ハ、恒心ノ無シ）トモイヘリ。

記録に残っている限りでも、梅園は『孟子』を三四歳の時点で熟読している。しかも、『孟子趙註』に依っているの
で、本格的である。『浦子手記』の「甲十四・丙子鈔」に其れが書き遺されている。

資料五

政ハ「生ヲ厚フスル」ニ在リ。「生ヲ厚フスル」ガ為ニ、「用ヲ利ス」。生、薄ケレバ、食ラザルコトヲ得ズ。生、
厚ケレバ、食ル心ウスログ。タトヘバ、溺ヲ救フガ如シ。自ラ水ニ溺ルル時ハ、子、溺ルルトイヘドモ顧ズ。自
ラ舟中ニ安ンズレバ、猫犬ノ溺ルルヲ見テ、打チ過グル人ハナシ。唯、勢ノ、足ルト足ラザルトノアイダナリ。
故ニ、「民」、「生、厚フシテ」、然シテ後、「禮讓廉恥」ノ風、唱フベシ。「民」、「生、厚シ」トイヘドモ、「禮讓廉
恥」ノ風、興ラザレバ、華奢放恣ニ赴ク。華奢放恣ナレバ、用、足ラズ。用、足ラザレバ、又、食ル。故ニ、賄
賂・争奪、興ルナリ。

「拙訳」 政治の要諦は「生活を豊かにする」(「厚生」)に存在する。「生活を豊かにする」為には、「道具類を使
利にする」(「利用」)。生活が貧しければ、金品を貪り求めざるを得ない。生活が豊かであれば、貪りもと
める心が希薄になる。其の心のありようは、例えばあたかも水に溺れている人を救済する際の其れに似て
いる。つまり、自分自身が水に溺れている時には、仮に自分の子供が溺れていたとしても、振り返りもし
ない。しかし、自分自身が舟の中に居て安全な場合には、仮に猫や犬の様な家畜が溺れているのを見てさ
え、放置したままでやり過ごしてしまう人など居やしない。つまり、此の行動に差異が発生する理由は、
唯々、其の時、情勢的に充足しているか否かの相違にのみ有る。故に、人民と云うものは、「生活が豊かで
あって」、しかる後に初めて「礼讓廉恥」の風潮を唱導すべきである。人民と云うものは、いくら「生活が

豊かになった」としても、「礼讓廉恥」の風潮が興起されなければ、「華美」や「奢侈」や「放恣」へと赴く。生活態度が「華美」や「奢恣」や「放恣」へと赴けば、道具類が不足してくる。道具類が不足してくると、再びまた、貪りの心が頭もたげてくる。故に、「賄賂」と「争奪」が発生する。

此の「資料」は、明白に「政治学」と「倫理学」の領域を問題にしている。「政ハ生ヲ厚フスルニ在リ」と云う一節は、政治の要諦は「厚生」に在ることを示す。水に溺れる人と助ける人の、状況に依る精神の在様に関する例え話は見事と云う外ない。読者に注目してもらいたいのは、貧困からの脱出法として「賄賂」が問題になるのではなく、「華奢放恣」即ち「華麗」「豪奢」「放漫」「恣意」の爛れ果てた生活を獲得・維持したいが為にこそ問題になると云う「賄賂」の本質まで突いている事実である。

資料六

廉恥ノ風、荒メバ、人、賄賂ヲ好ム。礼讓ノ教、至ラザレバ、人、争奪ヲ好ム。

「拙訳」 「廉恥」を知ると云う美風が荒廃すると、人間は「賄賂」を好む様になる。「礼讓」の教育が不足する

と、人間は「争奪」を好む様になる。

此の「資料」は、明白に「倫理学」の領域を問題にしている。「廉恥ノ風」と「礼讓ノ教」の二句が其の事実を示す。

大佛次郎賞

第15回
受賞

司馬 遼太郎
山田 慶兒
両氏に決まる

第十五回「大佛次郎賞」は、朝日新聞社が委嘱した選考委員による選考の結果、次の二氏に贈ることになりました。候補作品は今年四月末以来、読者と有識者のアンケートによる推薦を求め、読者推薦三百三十九点、有識者推薦五十六点を合わせて選考し、受賞作を決定しました。

一、『韃靼疾風録(だつたんしつぷうろく)』(中央公論社) 司馬 遼太郎

一、『黒い言葉の空間』(中央公論社) 山田 慶兒

贈呈式は十四日午後二時から東京・築地の朝日新聞東京本社で行い、賞牌(しょうはい)と賞金百万円をそれぞれ贈ります。四日付朝刊に、受賞者の「人と作品」と、選考委員の選評を掲載します。

◇選考委員

井上靖、加藤周一、河野健一、司馬遼太郎、都留重人、
鶴見俊輔、秦正流、渡辺格(アイウエオ順、敬称略)

朝 日 新 聞 社